

## 英雄叙事詩と国家:「アルパミシュ」と「マナス」を例に 坂井 弘紀(千葉大学文学部)

ソ連崩壊後、新国家が独立した中央アジアでは、「民族文化」の「復興」が様々な分野で顕著になった。英雄叙事詩の主人公は「民族英雄」になり、叙事詩を讃える国家行事が行われた。しかし英雄叙事詩が「国家」の意向を敏感に反映するという事は、最近に始まったわけではない。

叙事詩は、古くから為政者や権力者によって、その権威の誇示や統治する集団の団結のために利用されてきた一面がある。かつて部族集団について歌っていた叙事詩は、帝政時代には「テュルク民族」や「トルキスタン人」としての意識の鼓舞に利用され、ソビエト時代には、世相や政策を反映して、ときには称賛されたり、またときには非難されたりと複雑な扱われ方をされてきた。さらに、中央アジア諸国が独立国家になるとその叙事詩のその性格は、新国家建設のためのシンボルとして、さらに顕在化・明確化されて、「政治利用」されるようになった。それは、叙事詩を題材にした種々の国家行事の開催や「愛国教育」の分脈における叙事詩の教材化などに見られる通りである。

現在、英雄叙事詩が国家の象徴として政治的に利用されるのは、叙事詩が本来もつ性格に深く起因するためであるが、その一方で、叙事詩の学術研究にたいしては国家の十分な援助がなされていないといった問題も生じている。現代の中央アジアを論じるうえで、叙事詩とそれを取り巻く環境は、今後も注目する必要があるだろう。